



▲写真は鑄造のようすで、会津工場では世界にも誇れる製品づくりをしています！

3月27日、只見町二軒在家にある会津工場が「がんばる中小企業・小規模事業者300社」に選定されました。これは中小企業庁が革新的な製品開発、創造的なサービスの提供などを通じて、地域経済の活性化や海外での積極的な販路展開などに取り組む中小企業や小規模事業者を選定したたえるものです。

会津工場は、世界で唯一独自の^{ちゅうぞう}鑄造技術「Hプロセス工法」を導入して、精密鑄造技術による量産体制を確立し、製品は高精度・低コストで徹底した品質管理を行っていることが今回評価されました。鑄造とは鉄などの材料を熱して溶かし液体にしたあと、型に流し込んで目的の形に固める



▲新工場を近く本格稼働させ、今後はさらに受注を増やす予定です。これからはさらに多くの車に会津工場の製品が使われる事でしょう!!

株式会社 会津工場
**全国385万社の中から
 「がんばる中小企業・
 小規模事業者300社」
 に選定!!**



▲記念の賞状と盾を持つ鈴木 直記 代表取締役。会社では新たな製品を開発するため専門的な知識がある人を求めているとのことでした。

加工方法で、会津工場の製品は他社で鑄造後に必要となる削りや溶接などの加工作業の必要がない製品となっており、費用や加工時間を減らす事ができるので多くの自動車部品メーカーから支持されています。



▲どちらも同じ製品ですが、右が他社製品で、左が会津工場の製品です。会津工場の製品は必要な穴あけ加工などが鑄造段階で行われている事が分かります。

ブナセンター講座

「森を作る鳥たち—鳥と果実の共進化—」

企画展「季節とともに生きる只見の野鳥とその生態」の開催に合わせ、3月7日にブナセンター講座を開催しました。講師に上田恵介氏(立教大学理学部生命理学科教授)を招き、鳥と果実の関係がどのような進化につながっていったのか、そして“森を作る”とは一体どういう事なのかを話していただきました。

まず「共進化」について話していただき、これはどちらか一方の行動だけでは起こらず、相互作用によって起きていくのだそうで、鳥が“果実を食べる”という行動を起こすことにより、結果として種子を散布したい植物はより優先的に種子を運んでもらうため様々な工夫を凝らします。植物は動けないので、子孫を残すため種子を遠くへ散布しなければならないからです。散布の方法には、風や水流など自然の力に頼る方法のほか動物に種子を運んでもらう方法もあります。

例えば、センダングサやオモナミなどは体にくっつく付着型、リスやノズミ、カケスやホシガラスなどに見



▲参加者は上田先生の話に興味深く聞かれていました

られる貯食型などがあり、もっとも多いのは周食型と呼ばれる果実を食べた結果、食べ残しや排泄物に種子が混ざり散布される方法です。

鳥が食べる果実は様々な種類がありますが、その中で鳥に優先的に果実を食べて種子を運んでもらうために、色や形・可食部の成分などを進化させていく上で、鳥やその他の種子を運ぶ生き物も、植物だけが得をし、自分たちが損をしないように進化してきたことを今回の講座の中で知る事ができ、そうした鳥と植物の関係によって、様々な植物の種子が運ばれ生育し、新しい森を作っていくことを学びました。

「上田先生と歩く!冬のブナ林」

翌日の3月8日には、ただみ観察の森・楢戸の二次林、只見ダム周辺で自然観察会を開催しました。講師は前日に引き続き鳥類の生態が専門の立教大学の先生です。

まず、楢戸の観察の森へ向かいました。森へ入るには雪の壁を乗り越えていかななくてはならず、数日前下見した際につけて置いた階段を登り、そこからスノーシューを履いて歩き始めました。残念ながら、ここでは鳥を見ることができなかったのですが、動物の足跡や糞、幹に残っている熊の爪痕、ブナの膨らんできた冬芽などの観察や、雨水がブナの幹を流れる樹幹流を見るなど、冬の森を満喫しました。



▲ブナの前で記念撮影

そして、場所を移して只見ダムでは、オオバン、カルガモ、カンムリカイツブリ、カワアイサ、キンクロハジロ、スズガモ、マガモなどの水鳥を観察することができ、上田先生に冬季の鳥の行動について説明していただきました。

偶然にも山の斜面に佇むカモシカに遭遇し、しばしのお見合いとなりました。カモシカは暫くは微動だにせずこちらを見ていたので、良い写真が撮れたのではないのでしょうか。

参加者からは、スノーシューで雪上を歩くのが楽しかった、冬のブナ林が美しかった、水鳥を観察できて良かったなどの声が聞かれ、楽しんで頂けたようでした。



▲只見ダムで水鳥観察